Japanese Association of Educational Psychology

標として両親の話合いの場面が有効であること，及び理論的には実験室的に立証された学習に関する Osgood の干渉理論が，共通語と方言とのかなり異なつた2つの言語体系を必要に応じて使い分けているという意味で Bilingual な社会である沖縄における子供達の，非実験室的な自然言語の学習の場合にもあてはまること，さらに経験の Availability の因子を強調した Brown の仮設がこの場合にもあてはまることを報告した。

これに対して研究の方法論の問題として，言語的環境として取りあげられた5つの場面における共通語と方言との使用比率が，被験者による5段階尺度の評定値に基づくものであるところから，内須川（東京学芸大）は被験者達の評定値に年令差があるか否かを質問し，もしあるとすれば環境の指標としての客観性に問題が残るのではないかという意見を述べた。これに対して東江は年令差がないことを説明したが，地域，性，学年を要因としてなされた分散分析の結果によれば有意な性差がみられた。すなわち小3を除けば小1，小5，中2のいずれの学年においても，女子は男子よりも自分の家庭における両親間の会話に共通語の使用されている比率を高く評定し，特に中2の場合にこの男女差が一番大きくひらいている。この事実は，内須川は年令差のことのみを質問し性差の点について言及しなかつたが，環境の指標としてとられた共通語・方言の使用比率の評定に評定者，この場合は被験者達のパーソナルな例えば自我関与の要因の如きものがはたらいていることを予想させ，したがつて内須川が指摘した資料の解釈取扱い上の方法論的問題は，問題としてあとに残るように思われた。

また中野（東京教育大）は漢字使用の例等を挙げて沖縄と内地との言語的文化の相違について質問し，さらに社会的要因を強調して分散分析の結果に性差の要因と共に有意に表われていた地域差の問題に関して一層の説明を求めた。これに対して東江は，標本がとられた那覇と首里との地域に関する社会的文化的相違点と，それがその地域の人々の言語に及ぼす影響について説明した。

福沢（東京教育大）の研究（616）においては，それが漢字学習のカリキュラムに心理的発達に則した一貫性を得させるという教育的目的のために，児童のよく知つていることばの採集がなされたものであることが述べられた。

それに対して堀内（東京学芸大）は，児童がよく知つていることばと，よく表現できることばとはちがうのではないかという疑念を述べ，さらに採集されたことばを基にして，心理学的一貫性の見地から漢字学習の系統的段階を考えるとして，具体的にはそれぞれのことばをどの段階に指定するかという問題が質問された。これに対して福沢は，堀内の指摘した点を肯定し，さらに児童がよく知つて使つていることばでも大人には大事でないことばもあるので，学習すべき漢字として取り上げる場合には実際によく使われている漢字と観点から考えられなければならないが，厳密にはさらに今後の検討を必要とすることではあるが現在のカリキュラムでは小学生の下学年に対する漢字の配当が少ないように思われると答えた。

内須川（東京学芸大）の研究（617）においては，母親の過保護型の態度が多いことが強調されていた。

（岩城正彦）

24. 教　科・指　導　(4)

618–623 「道徳」授業過程の心理学的分析 (IV)

①和　田　三　郎(東京・深川三中)
②大　橋　一　憲(東京・池袋中)
③上　野　武　雄(東京・中村中)
④加　部　佐　助(東京・荒川九中)
⑤石　出　恵　豊(埼玉・田ヶ谷中)
⑥沢　田　慶　輔(東京大学)
神　保　信　一(明治学院大学)

① 内面化と研究のねらい

本研究は，「道徳」授業過程における“個人の内面化の追求”をテーマに，内面化の個人差の実態をあきらかにしようとするもので，「人間愛」の主題で3学級142名を対象に4時間の授業を行ない，その前後に課題作文ほか諸調査を実施し，第Ⅱ報で指摘した「内面化」の3種の意味を念頭において，その観点から分析・検討する。

② 内面化の個人差

主題「人間愛」にそつての一連の指導を通して，作文にあらわれた内面化の個人差を類型化することにより，それぞれの型で生徒の受けとめ方に何らかの共通性を持つているとともに，生徒のもつ内的条件にもまたいくつ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

かの共通要因があり，両者のからみあいが，内面化に個人差をもたらす原因となつていることが考えられた。

③ 主題のねらいの認知における個人差

にくしみやくやしさを自己の経験として明確に意識化でき，資料に対して共感的理解の深まつた生徒は，ねらいの認知の度合が高くなる。又先に述べた二点が不十分であつたり，資料に対し理解や洞察が不足していたり，資料を鑑賞的態度でのみ受けとめ心情化にまで至らない生徒においては，ねらいの認知の度合が低くなる。

④ 自己経験の意識化における個人差

指導前に意識調査を行ない，葛藤場面において感情移入させて考えさせるとともに，憎しみやくやしさの自己経験を作文に書かせ，生徒によつてよびおこされた自己経験の意識が，指導の深まりにつれてどのように変わつていつたかを追求した。その結果，自己経験の意識化にはかなりの個人差があり，実態に即した指導が望まれた。

⑤ 日常生活への転移における個人差

作品に対する知的理解と作中人物に対する共感的理解がどのように深まり，さらに，自分自身だつたら作品を通して学習されたことが実践されるかどうか，つまり，自己経験の意識化がどのようになされたかについて，作文，授業記録，面接，観察メモなどを用いて分析を試みた結果，かなり個人差のあることが認められた。

⑥ 総括と考察

目標のねらいの認知，日常生活への転移に関する判断，自己経験の意識化の3点を中心として，「道徳」授業における生徒の学習の個人差が究明されたが，この個人差は，「道徳」授業において十分に考慮に入れることが必要なものである。この個人差に対する指導上のくふうの効果についての実証的検討は今後の課題として残された。

討論の概要

部会の特徴

この部会の6つの研究発表はいずれも，道徳授業過程における内面化の個人差の追求を主題とする共同研究のチームによるものであつた。沢田（東大）によれば，仮説的には，(1) 道徳授業で主題として設定された徳目の内容の価値が内面化されて，自己が主体的に追求すべき価値規範として意識の中に確立し，(2) 次に，時にはそのような価値志向に逆行するような自己経験が充分に意識化することが出来れば，目標とされた価値への志向をふくんだ力動的な自我の再体制化の動きが生じるであろうということ，および，(3) 教材として提供された作品の中の人物の心情に追体験的に共感的理論が深まれば，状況を異にする日常生活場面にも道徳授業の時間における学習の効果の転移が可能になるであろうということが予想されて，それぞれの次元における個人差が調べられた。

これに対して，この部会の討論は，道徳の時間特設の問題がかなりひろく深刻な論議の的になつた問題であることからして，発表者に対する質疑は基本的には必らずしも肯定的ではない立場からする発言が多かつたようである。

主要な議題

まづ細谷（国立教育研）らは，道徳授業の主題の受けとめ方および個人による内面化の程度をみるために研究者が生徒に課した課題作文の内容分析およびその評価のし方の例をあげて，設定された「人間愛」という主題の提示のし方が一方的で訓育的にすぎ，対人関係の中にある争いや対立を超えた「絶対愛」の理念の道徳的意味の分析が現実の社会の問題として不充分であることを，強くそしてかなり執拗に問題にした。徳永（福岡学芸大）も主題のねらいの意味を質し，また内面化されたということの確認の measure は何かという技術的な質問をした。

児玉（日本女大）は，道徳教育にある意味で原則的にともなう困難な問題点は教育効果の転移の問題であるとのべ，意識と行動は必らずしもあいともなわないものであり，外的な表現行動に至る可能性が保証されなければある価値が内面化されたとはいえないので，内面化に至る過程の一層の研究を要望した。

これに対して発表者の側から沢田は，その意味では幼児期の人格形成が基本的に重視さるべきこと，学校における教育はその土台に立つた修正であると考えていること，また Spranger の修身教授批判，すなわち，概念は修正しても意志には力なし。ということから，道徳時間以外の機会による訓練を必要と考えているが，しかしながら道徳時間内の技術的にもさらに研究したいという考えをのべて答えた。

内面化の過程における個人差の実態を明らかにすることは，道徳教育の授業効果を上げる技術の問題としても重要な問題であり，その意味でも内面化の過程の把握，評定の為の手段やカテゴリーが研究者たちによつて積極的に考案されていることは意義が認められるし，さらにこの研究を導く基本的な仮説として Rogers の臨床的な

NII-Electronic Library Service